



彦根地方気象台

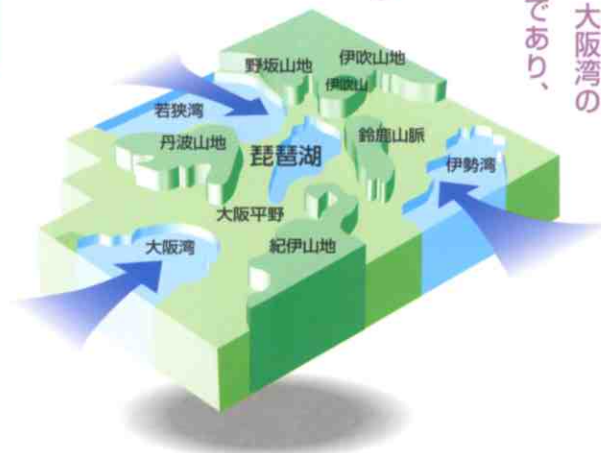
湖国の風と雪

風で変わる冬景色

風向きによって変わる降雪地域

滋賀県は雪国と言われていています。周囲を山で囲まれているといっても、北西部に高い山がないため、日本海でできた雪雲が太平洋へ抜ける通り道となりやすいからです。特に湖北は雪深い地域として

本州の最も細い部分に当たる滋賀県。周囲を100メートル級の山々に囲まれながらも、その合間をぬって若狭湾、伊勢湾、大阪湾の三方から風が入る「気流の三叉路」であり、北陸型、東海型、瀬戸内型の各気候区が重なり合い、風の吹く方向によって雪の降り方ががらりと変わる地域です。余呉町史編纂室の白崎金三さんと彦根地方気象台の能瀬和彦さんに、お話をうかがいました。



知られていますが、実はいつも湖北に雪が多いとは限らないのです。「大津でさえこれほどの大雪だ。湖北ではとてつもない雪が降っているだろう。」と思った日に湖北では晴天なんてことがあります。なぜなのでしょう。能瀬さんは言います。「秘密は風。風向きが少し違うだけで雪の降る地域と量が変化するのが滋賀の特徴

です。理由は地形にあります。近江盆地への「風の入り口」がほぼ限られており、入ってきた風がどの山地にぶつかって雪を降らすかによって降雪パターンがどんどん変化するのです。」

【風向による降雪地域分布図】

- 風向=西

若狭湾から流れ込んできた雪雲が北部の山間部に直接ぶつかり、木之本から伊吹山以北に大雪がふります。県内の大半は反対に晴。でも、油断は禁物。この状態が長く続くと余呉町あたりの積雪はかなりのものになり、5mを超す積雪も記録されています。湖北にとっては恐い雪。あの38豪雪もこのパターンでした。
- 風向=西～北西

県の北部一帯が雪となります。雪雲が県南部まで進むので、野坂山から伊吹山、岐阜県の関ヶ原にかけて特に多くなります。新幹線のダイヤや名神高速道路の通行に支障が出るのはこの風のときが多く、冬場に最も多いパターンです。
- 風向=北北西～北

湖西～湖南にかけて雪が多く、大津市でも20cmほどの「大雪」になることがあります。しかし、湖東は晴れることが多くなります。
- 風向=北西～北北西

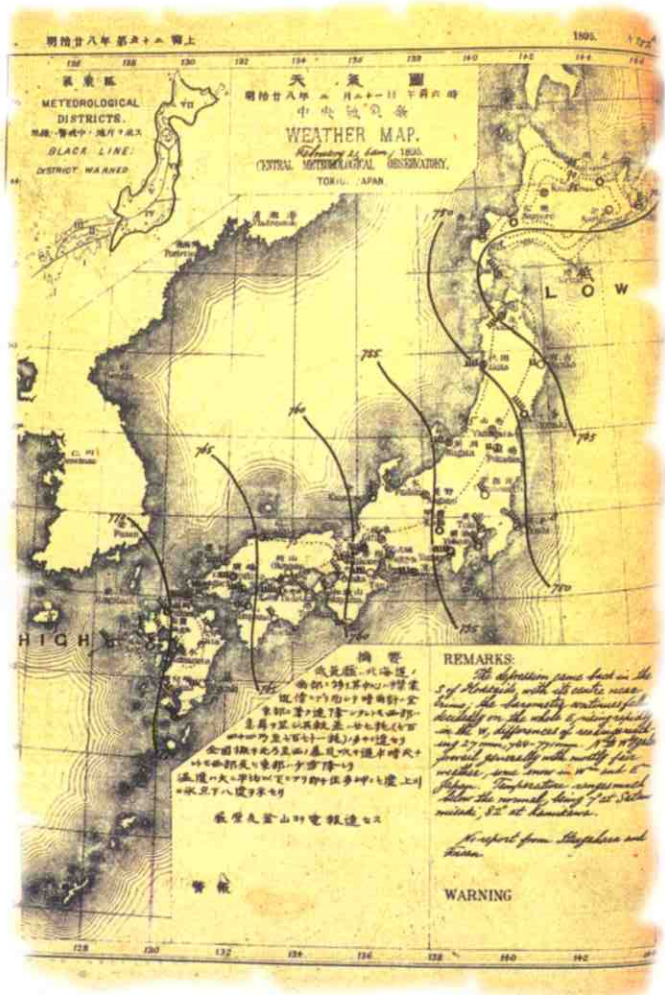
降雪地域がどんどん南に下がり、湖東の愛知川、近江八幡、鈴鹿山にかけてが中心。逆に県の北東部では雪が減り、晴れ間の見えることも。この風向きでは中部山岳の山陰となるからです。
- 風向=南西～西

滋賀県全域で晴。丹波・丹後の山陰になるため雪雲が入ってきにくいからです。
- 風向=北～北東

晴天が増えます。県下全域が中部山岳の山陰となるからです。

→の方向から風が吹くと50 30 10 (cm)の積雪になります。これだけ知っていれば、風向きを見てどんな雪になるかが大体予想できます。ただし、地上の風ではなく上空の風。天気予報で確認して下さい。

彦根地方気象台：明治二十六年九月、県立彦根測候所として設立。昭和三十三年に彦根地方気象台に昇格しました。現在、通信機器において気象庁本庁のスーパーコンピュータのデータや各地の種々のデータが短時間で受信でき、また気象観測機器なども充実しています。



日本で最初に天気予報が発表されたのは明治7年6月1日であった。1日3回の発表で、予報文も「全国一般風の向きは定まりなし、天気は変わりやすくだし雨天がち」という大雑把なものであった。



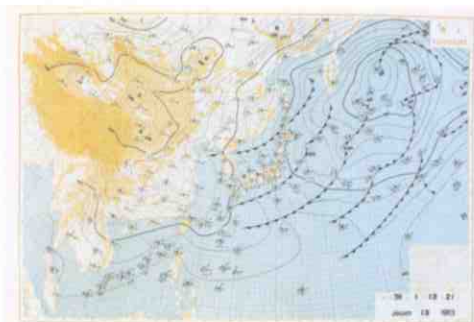
白崎金三さん

明治44年、余呉町生まれ。現在、余呉町文化財専門委員 余呉町史編纂室主任

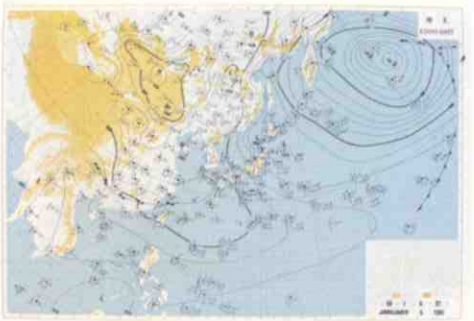
ひとつ雷、雪起こし、西気(にしけ)になると白魔(はくま)の季節

湖北地域にとって恐いのは西からの風だということが科学的に分かりました。それを裏付ける言葉が地元に残っていると、白崎さんは指摘します。

「西気(にしけ)」がそれです。意味は西から風が吹くこと。十月の終わりに以降に西気になるとしぐれが来ると言い伝えられています。これが湖北しぐれ、伊香しぐれ、余呉しぐれなどと呼ばれるものです。この時期は「弁当忘れても傘忘れるな」が合言葉。気温がさらに下る



昭和38年：山間部で300cm、平野部では40cm以上の積雪があり、各地で交通マヒがおこり、電線・電話線が切断され、山村30カ所が孤立状態となった。



昭和56年：中河内452cm、伊吹山820cmの積雪。住宅一部破壊は2,981戸となった。

資料提供/彦根地方気象台

と、みぞれとなり、そして大雪となつていきます。」
気温が下がり始める合図は雷。西高東低の冬型気圧配置に変化するときの大気の不安定な状態が生み出す雷が冬の訪れを告げます。
「ひとつ雷、雪起こし」と地元で言うのはこのこと。毎年十月二十日に行われる伝承行事の「雲定め」はそのころの気圧配置を見るもので、雲が日本海側から強く押しつけてくるようなら、その冬の雪はひどいと判断されます。西高東低の冬型気圧配置の勢いが強いからです。雲定めは翌年の二月二十日にも行われ、まだ押しているようなら春の訪れは遅いと見なします。冬型気圧配置がまだまだ頑張っているからです。」
湖北ではひとたび大雪が降ると、雪に閉じ込められる生活となります。不便であると同時にこれが湖北独特の文化を生み出しました。

たいで道を歩いたほどです。かつて人々を閉じ込めてしまう雪を白魔(はくま)と呼んだのも、そんな雪への恐れからです。雪に閉じ込められた生活ですから保存食が必要。若狭の塩と琵琶湖のフナ、それに近江米を合わせて生きた保存食が鮑(なまこ)し。アユを串に刺して焼き囲炉裏の上でさらして乾燥させたものや、針金状の真っ白な乾燥フキ、ゆでた栗を干したカチ栗……など、湖北の食文化は雪が生み出したものとも言えるのです。」

